

# 『栄花物語』続編の本文

— 学習院大学日本語日本文学科所蔵本から —

Studies on the Sequel to *Eiga Monogatari* in the Possession of the Gakushuin  
University Library of the Department of Japanese Language and Literature

加藤 静子

Shizuko KATO

## 一、はじめに

作り物語は、享受者によって書写の際に自由に書き改められてよい性格をもつものであったらしい。片岡利博氏は、そのあたりを物語の書写に関する『枕草子』の言説や『狭衣物語』の本文の実態から、納得できるかたちで明らかにされ、活字本で提供された「最善本」だけで研究する物語研究に異議を唱えている<sup>(1)</sup>。『狭衣物語』の場合、中世初期という伝本中最古の書写になる深川本が実は幾重もの混態本文であることが、具体的に例示本文によって示されている。「解釈のフィルター」により書き改められていくこと、諸本間で「フレーズの入替わり箇所」は校合されて本文中に取り込む際に行わ

れがちとも指摘する。四巻からなる深川本が、巻によって基本本文・派生本文の取り合せは系統分類・写本の層まで変わる実態が見渡されている。「よい本文」が必ずしも古い写本ではないという点も明らかになった。片岡氏は、本文異同についてその指摘と解説で終らせずに、新たに本文が生成してくる、まさしく現場レベルをみごとに突きとめられた。諸本が発生するメカニズムを説かれた瞠目すべき著書である。

歴史物語の場合にはと言えば、『狭衣物語』ほど自由に書き改められた徴証を私には見出せていない。本文異同が起きる原因の一つに、本文を丁寧享受し、その歴史的事象について調べて注書きして、そうした勘物の類が本文化されてしまうという傾向はあると言えるだろう。

『大鏡』の場合には、歴史的人物に関わる履歴や逸話・説話の類を加えて、大きく増補していく本文が見える。『大鏡』が当初書き留めた歴史範囲や意図を超えて、後の時代から『大鏡』を書き継いで、同じ作品名で増補していくことも行われた。『大鏡』の帝紀・列伝・雑々物語というゆるやかな構造体が（『雑々物語』も増補本文とみる向きもある）、増補を行いやすくさせているとも思われる。『大鏡』では、歴史を俯瞰できる後の時代になって、享受者がさらなる書物などによって、記された範囲の物語に付加していく、ある種の歴史解釈を加えていく行為が見てとれるのだが、しかし、付加したことで、本来の『大鏡』が持っていた執筆意図から逸脱して、当初期の性格を変えてしまう結果をもうむ。新編日本古典文学全集「古典への招待」で、二字下げの増補部分を別に読んで欲しいと願ったのも、そういう理由からであった。やはり、截然と分けてまずは別の性格をもつ作品として読むべきであろう。『栄花物語』では、異文が発生する場はどんなところなのであるか。私にはまだ明確な像が結べないでいる。

松村博司氏は長年にわたる『栄花物語』諸本研究の成果に立たれて、校注書や全注釈書をものされ、主要写本による校本も刊行された<sup>2)</sup>。氏は、『栄花物語』（以後、『栄花』と略称する）を古本系統・流布本系統・異本系統の三つに分類されて、古本系統の梅沢本（三条西家旧蔵、現九州国立博物館蔵）を最善本とされた。よって、近年の注釈書の底本として梅沢本がもっぱら採用されている。なお、『栄花物語』の研究『校異篇』では、正編では、梅沢本を底本にし、右に西本願寺本（流布本系統）、左に富岡甲本（異本系統）で対校を示し、さらに頭注欄で他本の校異に言及された。続編では、底本を梅沢本、左

に古本系統第二類の陽明文庫本の校異を示し、頭注欄に西本願寺本・桂宮本の校異を示されている。

松村氏の研究成果が偉大であるだけに、さらなる伝本研究はほとんどなされていなかった状況下、久保木秀夫氏は、この最善本梅沢本が、実は形態も本文の性質もまったく異なる残欠本二種の取り合せ本であることを明らかにされた。巻一〜二〇までの十帖が大型本であり、巻二一〜四〇までの七帖が柀型本であり、前半十帖がいわゆる「古本系統」という分類である本文であるのに対して、後半七帖は西本願寺本（流布本系統）の本文的性格を有しているという<sup>3)</sup>。

また、梅沢本と西本願寺本について書写・校合・伝来などを検討することで、梅沢柀型本・西本願寺本・東山殿御本などの重要写本の関係性を明らかにされ、梅沢大型本の出所や古筆切にも触れられた<sup>4)</sup>。それらの内容を私流に時間の流れにそって紹介すると、次のようになる。

文明十二（一四八〇）年、参内した中御門宣胤に『栄花物語』の「校合」が命じられた（『宣胤卿記』四月二十二日条）。彼は、西本願寺本の極札に第九帖（巻二〜四）の伝称筆者として名が見えた人物。また、文明十五（一四八三）年、近衛政家は、後土御門天皇に『栄花物語』第一帖は他人にはまかせられないからと、巻一〜巻三の書写を命じられ、書写を始め（『後法興院記』三月三十日条）、さらに書写を終えて提出されたのであろう、少々直して参らすようにとの命が下った（『同』五月二十七日条）。この政家も、西本願寺本第一帖の伝称筆者である。これら一連の『栄花物語』の書写・校合の親本がわかる決め手が、『お湯殿の上の日記』文明十五年八月二十二日条にあり、「東山殿へ、栄花物語返し参らせらるる」という記事が見えることであ

る。内裏での書写は東山殿義政の本を用いての書写・校合であったと知られるという。

さらに二十年ほど後、この「東山殿御本」つまり足利義政所持の「栄花物語」と「続世継」が売りに出され、後柏原天皇が入手し、それらを見た三条西実隆が「共以美麗、尤所望之物也」と記したのは、文龜三（一五〇三）年であった（『実隆公記』九月五日条）。

永正六（一五〇九）年には、実隆は、「栄花物語十七冊全部」を「礼物式百匹」で入手したと記す（『実隆公記』十一月四日条、八日条）。翌々年の永正八（一五二二）年三月七日条には、四〇巻すべてを「一覽」したとある。人に貸与した記事も見える。実隆が購入したこの栄花物語十七冊が、現在の梅沢本であり、鎌倉時代中期書写の本として失われず伝来したという（現、国宝）。

西本願寺本は、天文八（一五三九）年に、本願寺十世証如上人の母慶寿院に、禁裏から下賜された本であり（『天文日記』九月二十七日条）、久保木氏は、この本が、本文異同のあり方から、文明頃に後土御門天皇が政家他に書写させ、また校合させたその本で間違いないと指摘する。「東山殿御本」は西本願寺本の親本であった。

梅沢枅形本と西本願寺本とを対校して示し、久保木氏は間には少なくともA本という一本があり、そのA本こそが「東山殿御本」であったろうと推量され、松村説を修正された。

一方、梅沢本『栄花』の大型本は、料紙の大ききから鎌倉時代中期に始まる北条実時の金沢文庫の蔵書であったろうという高田信敬氏説を紹介して、金沢文庫本（とおぼしき）三十六人集の本が幾つか、実隆周辺に売り出された状況と思わせている。枅形本と取り合せになったのは、後半二十巻が失われたために、枅形本で補填

したものとされ、補填することが優先された結果、枅形本の残り前半八帖は散逸し、現在巻十九の断簡一葉が知られるのみという。

以上のように、由緒が明確になった梅沢本・西本願寺本なのであるが、巻二一以降は西本願寺本と同じ系統の本文であるということになり、異本系統の富岡本が正編巻三〇までしかないのも、『栄花』続編十巻（巻三二、四〇）の本文は一系統で読んできたことになる。

その後、中村成里氏が、学習院大学文学部日本語日文学科本（以下「学習院本」と略称）を、新資料としてその価値を紹介された。顕昭が歌学書で万葉集の成立を論じた箇所に、「世継」として『栄花物語』巻一「月の宴」の本文を引用するところに、『栄花』を証本・普通本とに分ける言及があることに注目された。顕昭『古今集序注』の、

又世継証本二ハ昔奈良帝御前ニモ万葉集エラバセ給フ云々者。然者、普通本二ハ萬葉五卷抄序ヲアシク心エテ、萬葉撰シ存ジテ和纒ニ書也。尤可付証本歟。件本ハ土御門右大臣家本也。

（傍線は加藤、以下同じ）

をもとに歌学書にあたり、梅沢本・西本願寺本・富岡本などの本文が「普通本」の内容であるのに対して、学習院本が「証本」の本文を持つことを指摘された。また、巻名も学習院本が独自のものをもつことに触れ、『後拾遺集』諸本にこの本の出現によって情報が補完されるものがあることを説明された。さらに、『栄花』諸本の書き入れや異文傍記の中に、学習院本と一致する和歌数例をあげた。学習院本と同じ本文の享受痕を見出されたのである。

その後、中村氏は、『栄花物語』巻二七本文の再検討―学習院大学文学部日本語日文学科所蔵本と伝二条為明筆六半切二葉・小林

正直旧蔵本をめぐって」<sup>6)</sup>を發表された。卷二七「衣の珠」の本文について、ツレである古筆切二葉が学習院本と同系統であると明示した。また、鎌倉期の梅沢本よりもやや古く推定されるという、小林正直旧蔵本（現在所在不明）について、国史大系の頭注欄の校異や松村氏による復刻本文を利用して対校された。結果、学習院本は、富岡甲乙本や小林本と似た箇所や、梅沢本・西本願寺本寄りの特徴をも示す箇所が見えることされた。そして、四つ目の新たな本文系統として、学習院本の全体像を吟味する必要性を説かれたのである。

近年の『采花』諸本研究からは、松村氏以降をどのように考えていくかが問われ、新たなスタート地点に立ち、写本にあたり読解する必要性が強く迫られている。

私も、中村氏の注5論文の後に、『采花』続編について梅沢本と学習院本とを対校して、今まで抱いてきた不審箇所が学習院本により綺麗に氷解することに触れ、学習院本の長所に言及したことがある<sup>7)</sup>。全巻をあらあら対校した私の印象では、流布本系統・異本系統も加わる卷二〇以前では、学習院本は、巻によつて、梅沢本（古本系統）、西本願寺本（流布本系統）、富岡甲本（異本系統）とそれぞれに近い傾向を見せる場合もあるが、やはりまったく別本文を有している。卷二一―三〇も、巻により、梅沢本（西本願寺本）寄り、富岡本寄りがあるものの、やはり独自の本文系統に思われる。大部の『采花』ゆえに、学習院本の全体像が明らかになるまでには時間がかかるであろうが、是非とも活用してゆかねばならぬ写本と思う。前稿では紙幅の都合で十分に伝えきれなかった憾みが残る。本稿では、学習院本の「本文」に注目すると、今までに行われてきた続編世界の読解に変更を迫るべき様相について例示し、さらに従来の

続編本文が有していた問題点について明らかにしてみたい。

本論に入る前に、ここで学習院本の本文的性格について述べておきたい。手許の紙焼写真や国文学研究資料館のマイクロフィルムで見えていくと、まず、梅沢本や西本願寺本に比べて漢字が少なく仮名が多い。「ちやうけん八年」などの年号、「せつしやう」「さ大しん」「大なこん」など官職名から、多数の登場人物名にいたるまで、仮名書きでなされることが圧倒的に多く、実に読みにくい。敬語法も理解しにくいところがある。脱字・脱文これまた多い。要するに注釈書などの底本に用いられる梅沢本とは較べものにならないほど、読みにくい本文である。随所に脱字・脱文が見られるが、続編では卷三六の途中まで、丁寧に補入や訂正がなされ（いつの段階でどんな性格の本によったかは、まだ明らかではない）、「イ」という異文傍記もある。本文自体は整っているとはいえない。なお、学習院本の書誌解題は中村氏注5論文Bでなされ、学習院本は文明から永正（一四六九―一五二〇）頃の写本という日本語日本文学教科貴重書目録を紹介する。つまり、西本願寺本とほぼ同年代の書写本となる。

## 二、和歌関係の本文異同について

卷三一「殿上の花見」。巻名は以下通行の名を用いる。巻名の由来となるのは、関白以下の花見を描いた次の場面による。梅沢本を本行に記し、私に句読点と濁点を付した。学習院本については、異同のみを右にルビ風に示した。なお以下、引用本文の梅沢本は、川口久雄『梅沢本榮花物語』五・六（勉誠社、一九八〇・八二年）の影印を用いる。

①まことや、殿上の人／＼も花見、関白殿も御らんじけるに、  
齋院より、

アのこりなくたづぬなれどもしめのうちのなは花にもあ  
らぬなりけり  
ときこえさせ給へりければ、春宮・大夫の御かへし、

イ風をいたみまづぞ山べをたづねつるしめゆふ花  
はちらじと思て

この哥のかへしは、かくこそ集には、

ウの(な)ミセケチこりなくなりぬる春にちりぬべき花ばかりをば

ねたまざらなん  
ときこえさせ給へり。

二〇一頁

(参考)に新編日本古典文学全集③の頁を付す。以下同じ)  
梅沢本を底本とする従来の注釈書では、ア(齋院) ↓イ(頼宗)  
↓ウ(齋院)の順で歌が贈答されたとする。だが、学習院本には、  
点線部内がない。『今鏡』なら、「集」「撰集」に歌がかくかくとあ  
る式の記事は多く見られるが、『采花』には、「集」に歌が云々といっ  
た右のような例はない。『采花』を読みなれた者には、点線部がな  
い学習院本が自然に思える。この巻はさかんに補入訂正が見えるが、  
点線部内に関わつては補人も異文傍記もない。

学習院本の文脈で、つまり齋院から「関白」頼通への贈歌ア「の  
こりなく」に対して、ウ「のこりなく」は返歌として読めるのかど  
うか。ウはアと初句をそろえ、春の終り散つてしまふにちがいない  
他の花を、「しめのうちの」齋院にある特別な花は妬まないで欲しい、

と齋院を訪ねてこない恨みを詠んだア歌に答えている。イほどの上  
手さはないが、贈答歌の体はなしている。

一方、梅沢本の文脈のイウが贈答歌たりうるかと言うと、ウがイ  
の何に対して「ねたまざらなん」と言うのか、「風」の注釈も行わ  
れているが、どうも腑に落ちない。点線部内に注目すると、「集」  
には「この哥(＝ア歌)のかへしは」イという返歌が見えますよと  
注記したものと読めるのではないか。

①の点線部内が注記ならば、頼宗と齋院選子との間のやりとりには、  
「この哥のかへし」と「御」がない点も、また、「かくこそ集には」  
から「と聞こえさせ給へり」と続きぐあいが悪いのも、説明がつく。  
①の点線部内の梅沢本本文は、いつの時点でか注記が本文化したも  
のと推量すれば、納得できるものがある。

それでは、「かくこそ集には」の「集」は何であろうか。アイの  
贈答歌は、『玉葉集』一五八・一五九(以下、歌の引用は特に断りがない場  
合は、新編国歌大観の本文による。ただし表記は改めた)に見える。「齋院に  
侍りける時、宇治前関白太政大臣所々の花みるよしききて申しつか  
はしける 選子内親王」、「返し、関白にかはりてよみ侍りける 堀  
川右大臣」という詞書・作者名が付されている。

また、頼宗の『入道右大臣集』にイ歌が見えるので、新編私家集  
大成で示す。

上卿、はなみるとて観音院のかたより雲林院をなかめて  
かへり(る)ほとに、さいるのくるまいて、ものみて  
すくるほとにふ(ミ)あり、みれば、しめのうちのはな  
ははなにもあらぬなるらし、とありしに

かせをいたみまつやまへをそたつねつる しめゆふはなはち

らしとおもひて」(八)

詞書によると、齋院女房からの文が届いた、その返歌とわかり、詠歌状況が『栄花』『玉葉集』と少し異なる。傍線部の和歌表現は、『栄花』と小異があり、むしろ『玉葉集』の「しめの内の花ははなにもあらぬなるべし」の表現と、「らし」「べし」の二字違いで似ている。なお、イ歌は、『後葉集』六四番、『続詞花集』六七番歌にも採られているが、詞書から察するに、ともに『入道右大臣集』を見ている。以上、点線部内の「集」は、『玉葉集』を指すと言いたいところであるが、『玉葉集』は『栄花』から採歌することもあり、さらにはウ歌の作者が頼宗でよいのかなど、まだ考えるべき余地が残されている。

次の例は、卷三四「暮れ待つ星」の後朱雀天皇と禎子との贈答歌である。関白頼通の養女嫺子が入内した。禎子内親王が皇后に、嫺子が中宮に立った。皇后禎子の皇女達が齋宮・齋院となり、二の皇子のみが傍らにいただけで、禎子は「ものをのみ思しめておはします」と、里邸にいて参内しなかつたと記す。その頃の贈答歌である。引用は①同様に記す。

②五月五日、内より皇后宮に、

もろともにかけしあやめをひきわかれさらに恋ぢにまどふ  
ころかな

宮の御かへし、

かたくにひきわかれつゝあやめ草あはぬねをやはかけ  
んと思し

右の後朱雀天皇の歌は、学習院本に「後拾遺ニかけしあやめのねをたえてトアリ」と注する。『後拾遺集』恋三の巻頭歌に見え、五日

の日に送ったとある詞書があり、

あやめぐさかけしたものとねをたえてさらにこひぢにまどふ  
ころかな(七一五)

とある。上句に大きな異同があるものの、「まどふころかな」は、梅沢本に同じ。返歌は、新古今集・恋四・二四〇に採られ、その和歌本文は学習院本の「あらぬね」に同じである。なお、『定家八代抄』は、『栄花』の贈答歌のかたちで、『後拾遺集』『新古今集』のそれぞれが同じ歌形で採られている(二三〇五・三〇六)。また、『大鏡』流布本の増補された「後日談」にも見え、贈歌は上句「もろともにかけしあやめのねをたえて」とあり、下句は梅沢本に同じで、返歌は学習院本に一致する。

返歌の「あらぬね」なら、あやめの「根」ならぬ、泣く声の「音」となり、自然である。「あはぬね」の表現は、「逢ふ」から、「根」に「寝」が響いてしまう故か、男性の立場の歌になら見えるが、女性の歌には見えない。返歌は学習院本本文の方が自然である。

なお、贈歌は、長い絶え間が場面で説明され、「五月五日」に送られたので、上句「かけしあやめ」と五日のことが詠まれ、学習院本の「けふ」であっても問題なさそうであるものの、「ころ」の方が気持は深い。「かけ」「ひき」「こひぢ」は「あやめ」の縁語。

右のように学習院本による一、二字程度の異同から、和歌を読み直す例として、同巻の次のような贈答歌がある。

三月に、女院彰子が我が子後朱雀天皇のいる内裏に入る。養育した孫女一品宮章子も東宮妃として内裏にいた。

③三月ばかりに、院、うちいらせ給たり。道などひまなく  
て、一品宮に御も(も)見せ消ち 対面なし。宮より、

君はなをちりにし花のこのもとにたちよらじとはおもはざりしを返。

御かへし、

花ちりし道にこゝろはまどはれてこのもとまでもゆかれ

やはせし

御てなどいとはわかくう。あてにかゝせ給へり。三〇〇頁

(一■は判読不能を表す。)

とある。二重傍線部、学習院本では、それぞれ、「たちよらじとはおもはざりし」ヲ見セ消チ、「らん」ニ訂正、「おもはざりしを」(「しを」ヲ見セ消チ、「けり」ニ訂正)と、梅沢本と同じ本文に訂正が加わっている。学習院本では、自身を育ててくれた女院が、折からの花の季節に、「ちりにし花のこのもと」(両親を亡くした子の許に一品宮、東宮妃章子。「木のもと」を掛ける。)に、「なほ……たちよらんとは」(やはり立ち寄ってみようとは)「おもはざりけり」(思つて下さらなかつたのでしたね)となる。一方、梅沢本では、女院が、両親を亡くした子のもとには、「たちよらじとは」(お立ち寄りになるまいとは)「おもはざりしを」(思わなかつたのに)となつて、「君は」の述語が「立ち寄らじ」となり、「思はざりし」の「思ふ」主語が一品宮章子となつてしまふ。副詞「なほ(猶)」の係る語が浮いてしまふ。学習院本の訂正本の方が、読解はスムーズになるように思われる。歌の前の散文部分は、梅沢本の方が理解しやすい。なお、右の贈答歌は、『万代集』雜一や『玉葉集』雜三には、学習院本の訂正本で採られている。これらにより学習院本が訂正したとも考えられるが、②や他例には勅撰集で訂正していない箇所もあり、さらに、『万代集』は『采花』続編を読んだ内容であり、『玉葉集』は『万代集』とともに『采花』続編を読んだ内容の詞書を有

している<sup>1)</sup>。あるいは、学習院本の訂正本のかたちが本来であり、そこから採つたのであろうか。

以上、校訂本文作りに関わる例をあげたが、伝記研究にも作用しかねない例が、歌の作者に見える。卷三二「歌合」。関白頼通の高陽院邸に姉女院彰子が渡御、頼通室などに対面、頼通は美を尽くして御覧に入れようとしたの記事とそれに続く場面である。ここは、梅沢本で引用する。

④ 院のかやうるん殿にわたらせ給ておはします。殿のうへに御対面などあり。殿、御ぜんはいかならん下臈(下臈)ヲ見セ消チ、傍書「けうら」カ)をつくしても御らんぜさせむとおぼしめしたり。いづみのうへの渡殿に四条中納言まいり給へるに、出羽弁対面したるに、殿うちより御ひとりもちておはしまして、そらだき物せさせ給てそひおはします、なかなかいとつゝましく、ものきこえ給もうちいでにくゝおぼえけり(学習院本)をはしけり)。系にかきたる心ちす。

そのころいよの中納言の君、瀧のをとをき、て、わきかへりいはまをわたる瀧のいとのみだれてをつるおとたかき哉

出羽の弁、

とくれどもあはにもあらぬ瀧のいとをつねによりてもみまほしきかな

などいとはかなき事をいひつゝあかしくらすもおかしくなんありける。 二四〇頁

「出羽弁」は、卷三二やこの卷三二では、中宮威子付き女房として登場していた。威子所生の馨子齋院に従う姿はあったが、ここは、

母中宮威子が存命の頃であつて、中宮は内裏にいた。出羽弁は、中宮威子亡き後に娘一品宮章子付きの女房となり、女院に引き取られた関係もあり、女院関係の歌はあつても、彰子女房とは見えない。女院が高陽院に入つて、頼通私邸として使用されていた頃のこと、なぜここに突如登場するのか不審であつた。

ところが、その二箇所ともに二重傍線部、学習院本は「系ちこのべん」とある。「越後の弁」なら、彰子女房であり、彰子のもとで育てられた後冷泉天皇の乳母となり、巻三一の彰子石清水住吉参詣に「二の車」に供奉したとあり、その折の歌も何首か見えて違和感はない。

また、傍線部の敬語「ものきこえ給」は、定頼と対面している場面なので、定頼に敬意を高める「きこえ」は自然であるが、出羽弁への敬意「給」はおかしい(他の場面に「出羽弁に尊敬語は付かない」。ここが、後冷泉の乳母「越後の弁」なら、敬語はもちろん領ける<sup>12)</sup>。

こうしてみると、出羽弁は威子出仕以前に彰子女房であつたとされるが、その有力な証の一つ④は崩れる<sup>13)</sup>。

また、「そのころ」以下の場面も、「伊予中納言」の出自など未詳であるが、歌の内容からも段落の続きからも高陽院の瀧を歌つたものと解され、「越後の弁」なら高陽院に滞在する女院女房同士の和歌としてふさわしくなる。

以上、学習院本を介した和歌をめぐる諸異同を見ると、『栄花』和歌本文について書写のあり方や周辺歌集との関係などから全体を見直していく必要性を感じるものである。

### 三、『栄花物語』巻三七巻末文の異同

『栄花』続編は、従来、一度に成立したのではなく、第一部・第二部と別に書かれたものが、一つになったものとされ、それは「定説」化しつつあるとまで指摘される(新編日本古典文学全集鑑賞注)。その考え方を支える大きな根拠が、巻三七巻末に付された文章によつていられる。その文章の一段落前ほどから、通行の注釈書の底本となつていられる梅沢本から引用し、学習院本との異同をルビ風に示す。梅沢本の改行は／で示す。

⑤……春とま

／らせ給ひにしうぢのぎやうかうせさせ給ふ。

／十月九日なり。めでたしなども世よのつね也なり。

／いふにもおろかなれば、なかくまねびものぞこなひにも

／やとて。『よのかはるほどのことまも、なくには

／かにうぢの人おぼしめす事のみいでき

／たるこそあやしけれ。後冷泉院のす

／糸のよにはうぢ殿いりみさせ給て、世の

／さたもせさせ給はず。春宮と御中あ

／しうおはしましければ、そのほどの御事

／どもかきにくうわづらはしくてえつくら

／ざりけるなめりとぞ、人申し。春宮

／とは後三条院の御事也。

他本の西本願寺本・陽明文庫本・桂宮本などとの異同は、漢字仮名以外には見えない。



梅沢本の「三」以降の文章は、ここで第一部をとどめたいわゆる跋文と見なされているものである。しかし、学習院本のみ、この跋文と見られる箇所を持たない。現象面からは、学習院本が削ったか、他本が付加したかである。続編は、異本系統に本文がないので、確率的には五分五分になったと言えよう。

学習院本は、何度も言及しているように、意味の通る本文として整っているわけではなく、脱文も多いし脱字により読めない箇所も多く見える。全体的に整理された本文とは言い難い。その性格を思うと、遡る本文は不明であるが、私は整えて本文を削除したわけではなく、本来的に跋文のような文章がなかったと考える。その徴証を幾つかの角度から証明してみたい。まず跋文めいた文章について、梅沢本の校訂本文で整理し、自分のかつての考えも訂正したい。

A 世の変はるほどのことどももなく、にはかに宇治の人思しめすことのみ出で来たることあやしけれ。

B 後冷泉院の末の世には宇治殿入りゐさせ給ひて、世の沙汰もせさせ給はず。

C 春宮と御仲悪しうおはしましければ、そのほどの御事ども、書きにくうわづらはしくて、え作らざりけるなめりとぞ、人申し。春宮とは後三条院の御事なり。

四二〇頁

卷三八「松のしづえ」開始が、すでに後三条天皇の御代になっていて、帝が一品宮聡子内親王女房であった源基平女を寵愛し、懐妊したことから始まるので、卷三七と三八との接続具合はまことに不自然ではある。長年にわたって研究史的には第一部と第二部とに分けて読まれて、巻末文は跋文として解釈され、物語が一度途絶したと思われて来た。

だが、右の直前の記事では、

春とまらせたまひにし宇治の行幸せさせたまふ。十月九日なり。めでたしなども世の常なり。言ふにもおろかなれば、もの損なひにもやとて。

後冷泉天皇の、頼通が住む宇治への行幸が、春に一度中止になったと記され、十月九日に実現したことが記される。『采花物語全注釈』や新編全集に指摘するように、この平等院への行幸は、『扶桑略記』に詳しいが、『今鏡』「黄金の御法」ではそれらを仮名文で記す。両書で見えていくと、行幸は、治暦三（一〇六七）年十月五日のことで、七日に帰京した。天皇が宇治橋を渡ると、伶人（楽人）が美しい舟に乗って榮を奏して河の上で出迎え、天皇が阿弥陀堂に礼するとき、池上に童楽を奏した。さらに経藏を御覧になる。食事の御膳は、金銀珠をもつてかざられる。翌日は雨で宇治に留まり、この地勢を賞で、詩会をもよおす。『今鏡』には後冷泉天皇の詩の一節が紹介される。七日還御にあたっては、頼通に准三宮と隨身・資人を賜る。隆俊以下、頼通実子の定綱・忠綱らの加階、平等院関係の僧侶らにも僧綱位を与え、神社にも位を授けるなどの恩賞が加わった。

A の「あやしけれ」と感想を洩らす余地は全くない。学習院本では、「めでたし」と言うのも平凡、表現しても十分に再現させることができなから書かない、と閉じた。それほど頼通と天皇との関係はよかつたと思われる。

B についても、頼通は高齢となつて（治暦四年七十七歳）病がちで宇治に籠つたのは、道長同様に御堂で往生を願っていたからと思われる。宇治に籠居しても、和田律子氏が言うように政治的エネルギーも文化に対する情熱も衰えず、宇治から発信し、内裏からの使者も

宇治を往復している。Bも現実とはかけ離れている。

確かに後冷泉天皇の病悩があり崩御近くに頼通が関白を辞すには、後三条天皇の関白を拒んだようにも見えるが、A Bの文からCに続けるための文脈としても、この時代を生きていたそれらも後三条帝系が続く時代に、摂関家側に属する女性が天皇と頼通との不仲を記す意味がない。つまりCの文章に必然性が感じられないのである。物語を継続するにあたって、一步譲って第一部としてここで物語を閉じるにしても、頼通の子孫は後三条天皇治世下とその系統の天皇の御代に生きている。

卷三八「松のしづえ」は、後三条天皇が女房基子（源基平女、小一条院の孫）を寵愛する記事から開始され、基子の懐妊、男御子（実仁親王）を産し、女御となり皇子を引き連れて内裏参入する、と物語を進ませる。この後三条天皇の皇子偏愛を非難する文脈で、後冷泉天皇の理想的後宮について語り、また頼通との関係を次のように振り返って記す。

後冷泉院は、何ごともただ殿（頼通）にまかせ申させたまへりき。後の世にこそ宇治にも籠りゐさせたまひて、「世も知らじ。ものなども奏せじ」とて、世を捨てたるやうにておはしましたしか、されど、除目あらんとては、まづ何ごとも申させたまひ、奏せさせたまはねど、かの殿の人に、受領にてもただの司にても、よきところはなさせたまひき。同じ関白と申せど二十余より八十までせさせたまふ、世の人なびき申し、怖ぢきこえさせたる、ことわりなり。

四三三頁

卷三七卷末文のA Bとは微妙に異なってしまう。

卷三七卷末文「東宮と御仲あしうおはしましたければ」の文章を、

卷三八「松のしづえ」に移行する前提として、私は長年読んできたが、学習院本の発見でそれを訂正する必要があると言えよう。

中村成里氏は、『栄花物語』続編における後三条院の位相<sup>17)</sup>において、従来どおり卷三七卷末文を頼通との険悪な関係があったと読まれたが、後三条天皇と頼通子息師実との関係は良好であったと指摘する。卷三八の実仁の五十日の祝いに、「師実ガ」抱きたてまつらせたまひて、上（後三条天皇）のくくめたてまつらせたまふほど」などから、実仁親王の後見として、後三条院のほかに、師実・聡子内親王らがいたとされた。

後冷泉天皇最末期に頼通が関白を辞したとき、子息師実は二十七歳右大臣の地位にあった。師実は、後三条天皇が踐祚した翌延久元（二〇六九）年の四月には、二十八歳で皇太子傳、ついで八月に左大臣となる。師実が後三条天皇の信頼が厚かったからこそ、また天皇が従来摂関体制を認めていたからこそ、彼の養女賢子も延久三（二〇七二）年三月に東宮（後の白河天皇）に入ることが許されたのであろう。頼通は、それを見届けて翌四年出家し、六年二月に八十三歳で亡くなった。後三条天皇が白河天皇に譲位すると、師実は、今度は後三条院皇子実仁親王の皇太弟傳となっている。「春宮と御仲悪しうおはしましたければ」とは言つてはいらぬ状況が、実は当時の政治の仕組なのである。

かつて後三条院が院政の開始を意図し、院政の始まりと歴史解釈されてきたが、近年の歴史学の成果では、後三条天皇はわが子実仁を立太子させるべく譲位したものであり、白河天皇も譲位したのは皇太弟実仁没後、異母弟輔仁親王をおさえてわが子堀河天皇を即位させる目的で行われたものであったとされる。白河院政と言われる

堀河天皇の時代も、後宮こそ院に掌握されたものの、関白師実・師通時代は院政とは遠かった。堀河天皇が亡くなって、幼い鳥羽天皇が踐祚したときに、白河院により外戚関係のない摂政忠実が裁定され、院の力が増大した。また、若い摂関家後継者忠実では、朝廷で諸々の難問題に対処することが困難になって、白河院による政治的決裁が行われ、その時から院政は開始するとされている。後三条天皇期には確かに母方のミウチ政治ではなくなつたが、道長・頼通時代に強固に築かれた公卿集団（政界中枢）も経済的基盤も人的資源も摂関家に牛耳られていたと指摘されている。道長から頼通へと築かれた長年にわたる体制を、関白教通時代に簡単に突き崩すことはできず、摂関家を無視してスムーズに政治を執り行える状況下ではないとされている<sup>18</sup>。

跋文めいた文章は、後世の享受の段階で付されたかと思う。たとえば、後三条天皇の東宮時代に、不仲であつた関白頼通が「壺切の太刀」を手渡さなかつたという『江談抄』の逸話がある。しかしそれとても、その事実はなく誤解であるという<sup>19</sup>。続編の認識と異なると中村氏が指摘された後三条天皇「聖帝観」なども、大江匡房、『続本朝往生伝』（成立は康和年間へ一〇九九―一〇三三）。この期は堀河天皇親政時代）に見られるとされ、匡房の願文が、『古事談』の編纂方針に影響を与えたとも指摘されているように、あくまでも後世の捉え方である点に留意したい。また、和田律子氏も、前掲注14論文で、後三条天皇時代が後世になって、たとえば『愚管抄』で「大きな変わり目」と意識し、大津透氏の「結果的にそうなつたがなにか摂関家を抑圧したわけではないだろう」（『日本の歴史6』講談社、二〇〇一年）という見解を紹介している。後世の『続本朝往生伝』で後三条天皇

の聖化が世にゆきわたつたと記すも、男性の捉え方である。師実時代のただ中に、その近くで生きた女性である続編作者とは異なつて、その後の歴史をみての言説かと思われる。

巻三七のいわゆる跋文が無いという学習院本の本文のあり方が本来的であり、やはり後世の注記が本文化したものと考えたい。

さらに、もう一言。C「そのほどの御事ども、書きにくうわづらはしくて、えつくらざりけるなめりとぞ、人申しし」とある。桜井宏徳氏は、二〇一四年十月の中古学会大会において、『栄花』は、日記文学同様に「書く」「記す」という立場に立つ、作り物語が書かれることを「つくる」と表現するのと異なる趣と言及された（『栄花物語』における「書く」こと）。その中で、右の「つくる」という例に触れた。私は、続編が『源氏物語』の影響を強く受け、頼通時代の作り物語隆盛期を経ていたとしても、跋文は後世の付加と見なすことが、一箇所のみ「つくる」の説明が容易になるのではないかと思う。桜井氏の活字化が待たれるところである。

#### 四、学習院本から推量される『栄花』続編における本文脱落の状況

『栄花』続編には、学習院本を介在してみると、欠文がかなりの箇所、かなりの範囲に及んでいて、従来の読み訂正を迫るほどである。

巻三九「布引の滝」には、梅沢本では和歌を欠いた空白がそのままになっている箇所が一箇所のみ見えるが、学習院本はその他にも何箇所かに及ぶ。なお、学習院本には、前述したように、この巻には校訂が付されていない。梅沢本からまず引用し、次に学習院本を

並べて見てみよう。教通薨去後閑白となった師実であるが、彼の嫡男師通が初登場する場面に空白部は見える。

⑥ 梅沢本

左大殿、御ありさまいとめでたし。この御はらのわかぎみは、ひと、せ御元服せさせ給て、中将にておはします、春日のつかひにたゝせ給。むかし宇治殿、少将にてつかひせさせ給に、入道殿、心づかひをとよませ給へる、思ひでられてあはれなり。

四八二頁

学習院本

さ大しん殿、御ありさまいとめでたし。この御はらのわかぎみ、一とせ御げんぶくせさせ給て、中将にてをはします。かすがのつかひたゝせたまひてのよ、との、□□□□□□□□(白ノママ行終エル)

(二行ノ空白アリ)

むかし心づかひをと、うち殿、少将にてつかひせさせ給ふに、入だう殿、よませ給へる、思ひいでられてあはれなり。梅沢本では読みすごして来たが、学習院本を目にすると、ここにはやはり、空白部に「との」(師実)の歌があった方が理解しやすい。歌を介してこそ、春日祭での、師実・師通と道長・頼通という二組の親子が対比できる。

正編の巻八「初花」巻頭には、頼通が十二歳で元服したこと、少将になって、春日の使に立ったことが記されていた。供人や道長の見物のことなどにも触れていた。雪の翌日、道長の我が子を氣遣う歌を詠み、公任の返歌、贈答歌を聞いた花山院の歌という三首が見えた<sup>20</sup>。続編でも、簡単ではあるが⑥で、師通の元服、近衛の中將

になり、春日祭使をつとめてという、初花巻の頼通と同じパターン<sup>21</sup>の記述がある。

『栄花』続編で、祭の使に触れるのは、通房、師実―師通―忠実といういわゆる頼通の直系の嫡子たる人物だけである。それだけ描くことを精選していたと考えられるので<sup>21</sup>、ここには道長―頼通、師実―師通と比較した意図から見て、「思ひ出でられてあはれなり」という感想が生じるだけの、「殿」師実の詠歌場面を記す散文と和歌とが、つまり「初花」巻に似た事柄が学習院本の空白部には在ったかと思われるのである。師実には承空本『京極大殿御集』(新編私家集大成)師実Ⅱ。底本は冷泉家時雨亭文庫)が現存し、高陽院七番歌合が有名であるだけでなく、若い時分から歌会を催していることが、『類題抄』『範永集』などから知られる<sup>22</sup>。和歌を得意としているだけに、空白部には和歌があるのが自然な場面である。

なお、歴史的に見ると、初花巻に見えた頼通の例・故実が、その後の撰家嫡子たちが春日祭使となる際に必ず先例として引かれるようになっていく<sup>23</sup>。

梅沢本では空白部を置かず本文が続いているが、学習院本には空白部がある例が、巻三九には他にも見える。師通が、参議で大将を兼ねたという記事から続く場面である。梅沢本・学習院本の順に示す。

⑦ 梅沢本

大将には殿、三位中将宰相にならせ給て、大将かけさせ給つ。宰相の大将ときこえさする、いとめでたくいまめかし。殿こそは中納言中将にておはしまし、か。四月によるづの事はじま

り、あるべき事ども、殿にてせさせ給ふ。大将殿、うへもわ

たらせ給へり。いとうつくしき御あはひなり。ことしぞ大将殿十六にならせ給へど、いとおほきやかにうつくしうあいぎやうづきめでたくおはします。／＼行幸は、この御時には、としごとみあれの日せさせ給。はじめたりし年、資綱の中将□□□……(空白)デ行ヲ終エル)

学習院本

とよみ給へりき。関白殿、御賀茂詣に、…… 四九二頁

大将には殿、二の中将さいしやうにならせ給て、大将かけさせ給つ。さいしやうの大将ときこえさする、いとめづらしういませめかし。とこそは中なこんの中将にてをはしまし、か。四月(□□□……空白)ノママ行終ル)

よろづの事はじまり、あるべき事ども、殿にてせさせ給ふ。大将殿、うへわたらせ給へり。いとうつくしき御あはひなり。ことしぞ大将殿十六にならせ給へど、いとおほきやかにうつくしうあいぎやうづきめでたうをはします。(□□□……空白)デ行終ル)

／＼ぎやうこうは、この御時は、としごとみあれのひせさせ給ふ。はじめたりしとし、すけつなの中将□□(空白)デ行ヲ終エル)……

(二行分空白)

とよみ給へりき。くわんぱく殿、御かもまうで、……

梅沢本には、／＼前に空白部はなく、続けて文章化されている。／＼後の空白部は両本同じようにある。

理解しやすいために、学習院本の空白ごとに記事を分断し、記さ

れたものをアエとして、続く関白賀茂詣まで、学習院本で校訂本文を作つて見ていきたい。

ア大将には、殿の三位中将宰相にならせたまひて、大将かけさせたまひつ。宰相の大将と聞こえさする、いとめづらしう今めかし。殿(の)ナシ。梅沢本ニヨリ校訂)こそは、中納言中将にておはしまししか。四月□□□……

イよろづのこと始まり、あるべきことども殿にてせさせたまふ。大将殿の上渡らせたまへり。いとうつくしき御あはひなり。今年ぞ大将殿十六にならせたまへど、いと大きやかにうつくしう愛敬づきめでたうおはします。□□□……

ウ行幸はこの御時は、年ごとにみあれの日せさせたまふ。はじめたりし年、資綱の中将□□□……

エと詠みたまへりき。関白殿の御賀茂詣、例の世に(二)にハ梅沢本(補ウ)ありとある人御前し、上達部、殿上人参でたまふに、殿は、いと重りかじめでたき御有様なり。中納言、宰相など渡りたまうて、末つ方に、宰相にて大将殿、隨身番ひ(梅沢本「つがはせ給」、御前して「して」ナシ。梅沢本(補ウ)おはします、いとめでたし。いとふくらかに愛敬づき、匂ひやかなる御有様にておはします。

続編は史実に忠実な傾向が見られるので、アからエまで記録類で再現させて見ると、これらは承保四(一〇七七)年四月のことを記していると推測される。

まず、アでは、「殿」(師夷) 子息の「三位中将」(師通。当時十六歳)が参議となり(承保四年三月二十七日のこと)、続いて「大将」を兼任したことをいう。任左大将は同年の四月九日のことであつた。「殿」

師実が、「中納言」の身分で「中将」をやめず兼任していたことと、師通が「宰相」で「大将」職を兼ねたことを、ともに特筆した。師通の例が珍しく、「今めかし」当世風というのであろう。続いて、梅沢本には、「四月によろづのこと始まり、……」と繋いであるが、学習院を参照すると、「四月」の後に脱落があつたと想定できる。

欠文のあとに、イ「よろづのこと始まり」「あるべきことども」が父師実邸でおこなわれたと見える。何がなされたかは不明であるが、少なくとも、どうして師通室が師実邸に渡御したのかわかる事情が記されていたかと思われる。私は、工の記事に師実の関白賀茂詣のことが記されていて、師通が宰相大将として父の前駆をつとめたとあるので、任大将にともなう「饗」という記事があつたものと推量する。

『江家次第』には巻二〇に「大将饗」を置いて、「承保四年四月九日」として、師通「大将」の饗について記している<sup>24</sup>。『公卿補任』による任大将の日である。任大将のときも、大臣大饗同様に、除目の日に参内、奏慶などを終えて（次将以下をひきつれ）里邸に退出、「大将饗」が行われている。部下を接待し饗応するものである。『江家次第』の座のしつらえを見ると、近衛次将以下、将監、将曹、府生、番長、近衛などが参集、さらに公卿や殿上人の席も設けてある。五献まであつて、祿の事も行われる。

四月九日の師通の場合、大将・中少将などが退いた後に、関白師実が着座、公卿に酒を勧め、公卿に祿を賜っている。引出物馬二匹は、民部卿俊家（師通室全子の父）・大納言忠家と記す。なお、忠実の任左大将の「饗」を参照すると、よそから女性たちが渡っている（『中石記』寛治八年三月二十八日条）。

さらに、学習院本には空白部があり、ウ白河天皇の「行幸」が突然語り始められる。イウの間に当初は文章があつて、もちろん前後のつながりが理解できたと見なされる。これは、新編全集の頭注にもあるように、「賀茂行幸」であろう。「みあれの日」に行われたというのは、次の『扶桑略記』承保三年の記事により確認できる。

三月四日。重行<sup>三</sup>幸石清水宮。此日。雨下。及<sup>三</sup>曉更<sup>一</sup>車駕還宮。四月廿三日戊申。行幸<sup>三</sup>賀茂社。已上<sup>二</sup>箇行幸。依<sup>二</sup>別御願<sup>一</sup>也。毎年春三月。為<sup>三</sup>石清水行幸之期<sup>一</sup>。又毎年四月中申日。為<sup>三</sup>賀茂行幸式日<sup>一</sup>。

白河天皇の特別な御願によつて、石清水宮と賀茂とにそれぞれ三月と四月中申日（賀茂祭の前日）に行幸を行うようにしたという。承保四年の石清水行幸は見えるが（『扶桑略記』三月九日）、賀茂行幸は残念ながら記録に見えない。「四月中申日」は十七日にあたり、続編に触れているところから、この年も行われたのであろう。

ところで、末松剛氏は、「撰関賀茂詣の成立と展開」<sup>25</sup>において、九十七年間にわたる賀茂詣について諸文献から調査され、「撰関賀茂詣」成立の判断基準を、①賀茂祭の前日に固定化されること、②大臣参詣という慣例から撰関の賀茂詣に限定されること、の二点におかれた。本論との関係に絞って紹介すると、撰関賀茂詣としての定着は、道長が若い内大臣頼通に撰政職を譲った寛仁元（一〇一七）年の父子参詣から始まるという。「大殿」道長の政治力を利用することで、大臣賀茂詣から、撰政内大臣による頼通賀茂詣の盛儀化がはかられ、「大臣儀」から「撰関儀」へと体裁を変質させたという。後継者の政治的立場の確立を企図した道長の政略の一環とも指摘された。頼通儀を大切に踏襲したとされる師実も当然行っていたであ

ろう。

頼通期に確立した撰閔賀茂詣であるが、教通の例は『江談抄』以外に記録に見えず、師実時代には、記録の少ない時期に相当するので、末松氏の整理された年表には、白河天皇時代の師実例は、承暦四（一〇八〇）年四月八日に見える（『本左記』）のみ。しかし、続編の空白部に想定されるのは、続くのが撰閔賀茂詣なので、「みあれ」の日が慣例となったという白河天皇の「賀茂行幸」と、その後に行われたであろう撰白師実の「撰閔賀茂詣」という華やかな記事が相並んでいたかと思われる。師通は、大将としてもちろん行幸に供奉し、両記事ともにその姿に触れたのであろう。つまり、師通はアからエまでの記事にすべて登場していた蓋然性が高い。

ところで、白河天皇の特別な「御願」とは何を指すのであろうか。末松論文によると、撰閔賀茂詣の式日である申日に行われていた白河天皇の賀茂行幸は、堀河天皇が踐祚した後は無くなると指摘する。ということは、皇室関係の神社なので、自分の子の帝位を願うことと関係するか。行幸を開始した頃と言えば、承保二（一〇七五）年九月撰白教通が亡くなり、翌日に師実が撰白となっていた時期だが、白河天皇の「御願」とは、承保元年十二月二十六日に、師実養女中宮賢子が敦文を生んだことと関係があるのだろうか。賀茂祭の前日が撰閔賀茂詣の日として定着していた経緯を考えると、天皇と撰白との連携プレーという憶測も成り立つからである。

さて、ウに続く文章、両本ともに欠文の見える、「はじめたりし年、資綱の中將□□……」は、「資綱」が「中將」と呼称されるのは、後朱雀天皇の長久四（一〇四三）年の任右中將から後冷泉天皇の承元（一〇四六）年に蔵人頭となるまでの期間である。文脈を生か

せば、あるいは「資綱の中（宮大夫）」（承保三年当時）であったものか。「中宮」は白河天皇の寵妃賢子である。工の前にある和歌の内容は不明である。

以上、巻三九「布引の瀧」の空白部には、かなりの文章量があったかと思われる。それもはやい時期での欠文を疑ってよいであろう。巻三九の欠失部を見ると、⑥⑦ともに、師通関係の記事があった。続編では師通はその子忠実よりも存在感が稀薄であると指摘されている。だが、脱落する以前の現在とは異なる本には、師通も撰閔家嫡男として、印象的に描かれていた場面もあったと思われる。

ところで、空白を置いて欠文を示す例は他の作品にもよく見ることが、空白なしに続けてしまう本よりも、丁寧な書写態度であり、それが学習院本に見られることは注意してよい。

巻四〇「紫野」にも学習院本には空白部が見え、やはり従来読み解けなかった箇所にある。後一条院の皇女章子は「二条院」として登場、後一条院の墓所に「菩提樹院」を建ててあったが、三味堂の傍に御堂を建て（『師記』寛治二（一〇八八）年八月十七日に供養とある）、御八講・五十講をなど行ったことを記し、

⑧ 梅沢本

御堂には故院の御えいをかきたてまつりたり。にさせ給はねど、御なをしすがたにて御脇足におしかゝりておはします、いとあはれなり。御女とて、女御殿、人の腹なりける中納言殿、いかにしてうつしとめけんくもゐにてあかずかくれし月のひかりを

うばぎみ（和歌ヨリ文頭二字ホド下ゲテ記ス）、くもゐにてすみけん世をばしらねどもあはれとまれる月

のかげかな

御前わたらせ給てみたてまつらせ給。おさなくおはしまし、  
ほどにて、たしかにもおぼえたてまつらせ給はぬに、……

五二四頁

学習院本

御だうにはこゝんの御かたをかきたてまつりたり。にさせた  
まはねど、御なをしすがたにて御けうそくにをしかりてを  
はします、いとあはれなり。□□□□御女とて、女御殿、  
御かたはらなりける中なごんのきみの、

いかにしてうつしとめけんくもゐにてあかずわかれし月  
のひかりを

くもゐにてすみけんよをばしらねどもあはれとまれる月  
のかげかな

うへわたらせ給て見たてまつらせ給ふ。をさなくおはしまし、  
ほどにて、たしかにもおぼえたてまつらせたまはぬに、……

と、それぞれ続く。幼いほどに死別し確かな記憶もない二条院章子  
は、「御絵みゑにても見たてまつらせたまふ、いみじうあはれにおぼし  
めさる」と、妹（馨子内親王）よりも恋しがつたと続け、長年の内  
裏住みをひきかえ、尼となり霞む空を眺める山里住まいを記してい  
る。続編巻三二に着袴の時から場面性をもって描かれ、後一条天皇  
（後冷泉天皇時代をほぼ宮中に生きた章子内親王に関する続編最後  
の記事である）。

この場面を、学習院本の空白四・五字分を斟酌すると、和歌の詠  
者の問題がより複雑となる。梅沢本では、後一条院の「御女」が女  
御に仕える女房腹の「中納言ちゆうなごん」という文脈になり、「いかにして」

の歌を詠むことになる。後一条院後宮には中宮威子のみで、「女御」  
もないのに不審であった。学習院本では、空白部において文章は  
断絶する。それでも、綺麗に解ける文章ではないけれど、何か本文  
的に混乱があつて伝わつたらしいことだけはわかる。

実は、「いかにして」の歌は、『後拾遺集』哀傷には次のように、  
菩提樹院に後一条院の御影をかきたるをみて、みなれま  
うしけることなどおもひいでてよみ侍ける

出羽弁

いかにしてうつしとめけむくもゐにてあかずわかれし月のひ  
かりを（五九三）

出羽弁の歌とする。『今鏡』すべらぎの上第一「子日」にも、出羽  
の弁の歌として、

いかにしてうつしとめけむ雲井にてあかずわかれし月の光を  
（一六）

と、第四句を『栄花』『後拾遺集』と異にする。

また、梅沢本・学習院本ともに、巻三七「煙の後」にも空白部が  
ある。梅沢本で示し、学習院本の異同は右にルビ風に示す。

⑨そのころ、皇后宮のうへの御つぼねのいづみに大なる桜おほきざくらをさ、  
せ給て人たまたくよみける

（梅沢本は一丁二行のみの本文であとは空白。学習院本も一丁  
の残り空白七行ほどある）

中宮皇后宮ときぶらはせ給て、内わたりにもあらずせばきに、  
……

右のように、大きな空白部がおかれていたのは、相当数の和歌が詠  
まれていたことを意味するのであろうか。

四〇七頁



以上に見た空白部の存在は、梅沢本・学習院本ともに空白部が無い箇所にも、欠文を想定して初めて理解できることに留意すべきと意識させる。

次はやはり卷三七の例である。梅沢本で示して、学習院本の異同はルビ風に付した。

⑩ 関白殿どのは宇治うち〔内〕ヲミセケチ、「宇治」ニ訂正をに御堂どうめでたくつくらせ給てこもりおはします。あじろのつみによりてにや、宇治うちに・御八講はんかうせまほしくおぼしめす。うちにてはれいあしなど申せどおぼしめしたちにければせさせ給。ノ九月廿五日なり。捧物ほうぶつなども御かたにいみじくせさせ給。中宮皇ちゆうぐう后宮のぼらせ給。しやうぞくなどれいのおろかならんやは。  
…… 四一四頁

右の文章には、「ノ」以前の頼通主催の宇治での法華八講と、「ノ」以後の後冷泉天皇が内裏で行った法華八講の記事が続いている。日付はどちらの文章にも関わりそうであるが、諸注釈書にあるとおり、『扶桑略記』治暦元（一〇六五）年九月廿五日条に見える四日間にあたる故後朱雀天皇追善のための宸筆法華経による八講である。右の文章からそれを読み解くことは不可能で、これも何らかの脱文ありとして読んだほうがよいであろう。

以上のように学習院本では脱落箇所と思われるものが、卷三七、卷三九、卷四〇に偏っていて、他にも空白が置かれる。梅沢本でいうと、第五節で述べるように、その範囲は一冊にまとめられているが、梅沢本・学習院本と分かれる以前の、かなり古い段階で、これらの巻には脱落が起きていたかと思われる。

続編のこれらの脱落箇所をどの程度の範囲と考えていくかによつ

て、続編の姿も大きく変貌してしまう。今後さらに検討を加えていかねばなるまい。

## 五 巻名に波及する本文異同

続編の巻名は、梅沢本他と学習院とで大きな異同が見える。すでに中村成里氏が注5 A論文で、正編続編の異同のある巻について言及し、それぞれの本に巻名の付け方に特徴があることを指摘している。巻名については『源氏物語』について論じる清水婦久子氏論考<sup>28</sup>があるように、正面から向き合うべきものであろう。

続編の巻の括りは、梅沢本は、卷三一～三三、卷三四～三六、卷三七～四〇の三冊に分かれる。学習院本は、卷三一～三三、卷三四～三七、卷三八～四〇の三冊からなる。それらを次頁表のように整理した。

中村氏注5 A論文で指摘するとおり、巻名は梅沢本と学習院本とはだいぶ異なる。

梅沢本には外題と見返しでは、作品名「世継」「栄花物語」と異なる。また、外題に巻名はなく、第三冊目は巻名すらも誤っていて貼紙による推定が残る。いつの時点でか書物に損傷が起きたものである。なお、西本願寺本や古本系統第二種と言われる陽明文庫本では、巻名は卷三八「松の下枝」卷三九「ぬのびきの瀧」卷四〇「紫野」となる。

続編にはそもそも巻名がなかったかと疑問視する向きもある。『狭衣物語』『浜松中納言物語』『寝覚』などのように確かに巻名のない物語は同時代に見える。けれども、『うつほ物語』『源氏物語』『栄花』

31	世継冊一	梅沢本内題見返し／巻初	学習院本外題	学習院本巻頭
32	二冊三	栄花物語冊一殿上花見／ナシ	殿上花見冊一	冊一殿○花見
33	冊二	冊二哥合／ナシ	哥合冊二	冊二哥合
34	世継冊四	冊三ざるはわひしと歎女房／ナシ	しゝのはて冊三	三十三幾留者輪飛之土歎女房或しゝのはて
35	五	栄花物語冊四晩待星／ナシ	秋のあはれ冊四	冊四秋のあはれ
36	六	冊五蛛ふるまひ／ナシ	さゝかに冊五	三十五さゝかに
37	世継冊七	冊六根合／小字デ「ねあはせ」	雲のかへし冊六	三十六くものかへしねあはせ
38	冊八	栄花物語冊七煙後／ナシ	七夕冊七	三十七たなはたけふりのち
39	冊九	冊八布引瀧	すみ吉冊八	三十八すみよし
40	冊	紙1 冊九松下枝／松の下枝 貼紙2 ナシ／貼紙3	布引の瀧冊九	まつのしつえ(小字デ) 三十九布ひきの瀧

\*梅沢本貼紙 1「松の下枝とや申すべき」／2「これやぬのひきのたきと申すへき」／3「まつのごすゑとにても申さはや」  
\*注1 小字で記す。  
注2・3 標目の後の空白部に記し、二つの巻名は同じ大きさ。

のような長編が一気に書けたわけではないし、年月も登場人物も多  
い物語には、巻名が付いた方がイメージしやすく、読者の共通理解  
も得やすいのではないか。

また、巻の名を前にして巻番号を付すかたちの学習院本外題と、  
巻番号に巻の名を添える梅沢本とは、どちらが本来的なのかを考え

ると、『源氏物語』を例にしても、前者とするのが自然であろうか。  
巻名についてどのように考えるべきか、今の私にはわからない。た  
だ問題点のみを以下に整理して後考に俟つことにしたい。

学習院本では、巻名として巻頭に二つ記される場合、一つは梅沢  
本等に一致する。そのような巻名の本によつたものであるうか。

巻三四の問題点。梅沢本は巻名「晩待星」(くれまつほし)、学習院  
本は「秋のあはれ」とある。この二つの巻名はそれぞれ和歌の表現  
によるものであるが、「くれまつ星」は学習院本にあるが、巻名を  
持つ梅沢本にその表現はない。それぞれの相当箇所を梅沢本・学習  
院本ともに引用する。

内容的には、七月七日、後朱雀天皇は故中宮姫子を偲び、忘れ形  
見の若宮(祐子内親王)に歌を送り返歌があつた。その贈答歌を記  
した後に、東宮が妃一品宮章子に送つた歌に見える。

**梅沢本**

春宮御方より一品宮に、

あふ事はたなばたつめにかしつれどわたらまほしきか  
さゝぎのはし

ときこえさせ給へりけり

三〇七頁

**学習院本**

春宮御かたより一ほんの宮に、

あふことはくれまつほしにゆづれどもわたらまほしきか  
さゝぎのはし

ときこえさせたまへる(る)ニ傍書「け■」。

学習院本には「くれまつほしにゆづれども」と、逢うことは「暮  
れ待つ星」に譲つたけれど、下句「鵜の橋を渡つてやはり逢いたい」

という。ここに梅沢本の巻名を含む表現がある。梅沢本ではその箇所が、「たなばたつめにかしつれど」となっている。梅沢本の、「たなばた」に「貸し……」の表現は、古今集にも見える表現で、織女星に「糸」「衣」諸々を供える意味で歌われる。たとえば公任集に、

七月七日女男にも言ひたるけしきしたる所

わが恋はたなばたつめにかしつれどなほただならぬ心地こそ  
すれ(三一)

とあって、和歌の表現としてはより整っている。学習院本には傍注「後拾遺二たなはたつめにかしつれど」と付されるように、『後拾遺集』恋二・七・一四には梅沢本の本文で見える。本文異同が、『後拾遺集』の注記本文から生じたのかと思いたくなる箇所である。というのも、「暮れ待つ星」という表現は、和歌には一首も見えないからである。梅沢本の巻名になり得たのは、学習院本のような歌本文があつてからこそと推量したい。

一方、学習院本の巻名「秋のあはれ」は、故中宮嬬子崩御に関わるもので、

故中宮のいづも、下野がもとに、

いかばかり君なげくらんかずならぬ身だにしられし秋の  
あはれを  
三〇四頁

による。後一条天皇中宮威子に仕えた出雲が、後朱雀中宮女房に送った歌である。後一条・後朱雀の両中宮が、ともに秋という季節に亡くなったことから詠まれている。右の歌は『後拾遺集』『今鏡』にも見える。

『今鏡』は、『栄花』からは和歌を一首もとらず、『後拾遺集』經由歌であると指摘されている<sup>29</sup>。かつて私は、「和歌資料から読む『今

鏡』<sup>30</sup> という拙文で、『今鏡』の和歌は、『後拾遺集』のみならず、他勅撰集と九割方重なっていて、秀歌がちりばめられていると指摘した。また、「歌句」のみで和歌を紹介する例は、先行する『後拾遺集』『金葉集』歌であることが多かった。『今鏡』には『栄花』続編と共通話題はあるが、続編を思わせる記事が見えず、『栄花』を「古き物語」「昔物語」「昔物語ども」と呼称しているところから、近き世白河天皇・堀河天皇を含む続編には不釣り合いな表現で、異本系統のような続編を持たない本文を見たかと言及した。しかし、『大鏡』が縦横に利用した『栄花』正編に一言も触れないのと同様に、『今鏡』も肝心の続編には言及しない可能性もあるのではないかと考えを改め始めている。

実は、『今鏡』「藤波の上第四」には「くものかへし」という章段名がある。学習院本『栄花』卷三六の巻名である。皇后宮寛子の春秋歌合における右大臣頼宗の歌であり、『栄花』に、

春雨にぬれて帰らん桜花雲のかへしの嵐もぞ吹く

とあり、『金葉集』『古来風体抄』にも見える歌である。「雲のかへし」には、

天喜四年、皇后宮にて歌合せさせ給ふに、堀河の右の大臣「雲のかへし」の嵐もぞ吹く」など詠み給ふ。  
四一頁

本文は海野泰男『今鏡全釈 上』（福武書店、一九八二年）による。とある。これは、頼通の娘たちの二人、養女中宮嬬子と「まことの御女」皇后寛子の叙述に見えるものである。そして、二人を結ぶ文脈には、

アその御事はさきに申し侍りぬ。……（女宮二人を生んで）あへなく崩れさせ給ひにし、いとかなしく侍りしことぞかし。まこ

との御女ならねども、いかに口惜しく思しめしけむ。秋のあはれいかばかりかはかなしく侍りし。 上四〇七頁

と、学習院本巻三四の巻名「秋のあはれ」が見える。もし『今鏡』作者が学習院本のような巻名をもつ本文で読んでいたなら、娘子から寛子への話題が『采花』続編を思い起こさせて進むことになる。「秋のあはれ」については、前稿でも気になっていた。ア例の他に、娘子崩御に使われていたからである。

アで、「さきに申し侍りぬ」というのは、「すべらぎの上第一」「星合ひ」を意識した行文である。語り手のいう「秋のあはれ」とは、後朱雀帝中宮娘子が長曆三（一〇三九）年八月媒子出産後、十日を経ず二十四歳で崩御したことと関係する。

イあさましくあはれなること限りなし。いとど秋のあはれ添ひて、有明の月のかげも心を傷ましむる色、夕の露のしげきも涙をもよほすつまなるべし。 上六〇頁

亡くなったのが八月ゆえの、悲しみを増幅させる「秋」の「あはれ」だけではないらしい。その直後に、

ウ後一条の中宮に侍りける出雲の御といふが、この宮に侍りし伊賀少将がもとに、

いかばかり君なげくらむ数ならぬ身だにしぐれし秋のあはれを（八）

と詠めりける。秋の宮うち続き、秋うせさせ給ひつるに、いとらうありて思ひやられけるも、あはれにこそ聞こえ侍りにしか。 上六三頁

と女房の弔問歌に、『采花』と同じ「秋のあはれ」歌が見えるからである。「秋のあはれ」は何の変哲もない言葉だが（『源氏物語』葵巻

や他巻にも見える）、『今鏡』には三例しかなく、離れた章にあるのに中宮娘子に関わる場面のみ使用するのには、意識的に指示する選択が働いている。イは和歌があるウの前にあり、『後拾遺』経由の引歌表現と見なしたのだが、『今鏡』作者がもし『采花』続編を読み、巻名も学習院本と同じであったなら、続編を継承していることになる。逆に続編を知らないとしたら、『采花』側が、『今鏡』に影響を受けた可能性も出てくる。『讃岐典侍日記』の続編享受の例もあり、『今鏡』では『讃岐典侍日記』に言及しているので（すべらぎの中第二「玉章」、前者の可能性が高いであろうか。多方面から検討することにより、今後に明確な答えを期したい）。

付記 本稿をなすにあたって、学習院大学日本語日本文学学科から貴重書を利用し公開することを許可された。あつく御礼申しあげる。

### （注）

1 片岡利博氏『異文の愉悦―狭衣物語本文研究』（笠間書院、二〇一三年）。

2 『采花物語の研究』（刀江書院、一九五六年）、『采花物語の研究 続篇』（刀江書院、一九六〇年）、『采花物語の研究 第三』（桜楓社、一九六七年）、『采花物語全注釈 一〜八、別巻』（角川書店、一九六九年〜八二年）、『采花物語の研究 新稿 諸本研究篇』（右文書院、一九八六年）、『采花物語の研究校異篇 上巻・中巻・下巻・続篇』（風間書房、一九八五〜八八年）、『采花物語の研究 補説篇』（風間書房、一九八九年）、『采花物語の研究 補説

- 篇続』（風間書房、一九九〇年）他。
- 3 久保木秀夫氏「『采花物語』本文再考―西本願寺本を中心とする―」（『中古文学』80号、二〇〇七年十二月）。
- 4 久保木秀夫氏「『采花物語』梅沢本と西本願寺本 付、足利將軍家の蔵書」（『研究と資料』第六十輯、二〇〇八年十二月）。
- 5 A「学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵『采花物語』の本文―その性格と価値―」（『中古文学』89号、二〇一二年六月）による。B「注という異言語―書き込まれた学習院本『采花物語』姫子女王説話」（『日本文学』二〇一一年五月）が先行する。
- 6 『教育と研究』（早稲田大学本庄高等学院研究紀要）第三二号、二〇一四年三月。
- 7 拙稿「研究余滴 一写本からの贈り物」（『むらさき』五〇集、二〇一三年十二月）。
- 8 拙稿「和歌資料から読む『今鏡』」（『國學院雑誌』第一一四巻第十一号、二〇一三年十一月）で触れた。
- 9 『采花』続編では、たとえば、卷三八「松のしづえ」に、後三条天皇讓位の際に、『あひも思はぬ』など、弘徽殿の壁に伊勢が書ききつけけんなど、思ひ出でられて、何ごとにも目のみとまる」（四四五頁）などのように、歌句を引用する。
- 正編の特異例として、卷二二「後悔の大將」に、教通室（公任女）が亡くなり法事も終えて、公任室が孫たちの世話にと御産に方違した家から教通邸に移る場面に、梅沢本には、次のように見える。
- 後撰集にあるやうに、「君はいかにとまちとはゞと」

10

- ふるさとに君はいかにとまちとはゞいづれのやまのくもとこたへん  
とある歌まつこのおりにおぼしめ（いで）二「め」ヲ傍記させたまふ。②三九一頁
- 「イ」を付記して本行で、「君はいかにとまちとはゞと」と同筆と思われる筆跡で続くが、この歌句に、「（と）ある歌まつ……」とあるのが、本来の『采花』の書き方ではなかったか。学習院本その他に、イの歌句はないが、歌一首は後に記されたものであろうし、「後撰集にあるやうに」も本来的なものかどうかは疑問に思われる。
- 梅沢本・学習院本に有意の校異がない箇所でも、注記として処理した方が無難と思われる本文が見える。たとえば、卷三四に見えた疑問に思える箇所である。一続きの文章を分けて、梅沢本で引用する。傍の人物注記も付したが、①④は稿者が付けた。
- A 皇后宮とは、陽明門の院におはします。女一宮は齋宮、女二の宮は齋院、左大殿のうへにおはします。をとこ<sup>後三条</sup>二の宮は、一院におはします。
- B 皇后宮、一、二の宮、齋宮、齋院』にゐさせた給ぬれば、ひとゝころわか宮うちあそばしきこえさせ給て、ものをのみおぼしめしておはします。二八九頁
- ABの『』部分について、「後の竄入なるべし」とする『采花物語詳解』の注はあるが、現在の注釈書では採らない。私は、本文Bの、「皇后宮」「一の宮」「二の宮」「わか宮」に付されたのが、それぞれAの注記①②③④であると思う。順番を同

じくし、A全体が後の歴史的出来事を踏まえた人物説明となっているからである。

## 11 『万代集』には、

後朱雀院御時、三月ばかり、上東門院内にいらせ給て侍りけるに、ひんあしくて御対面もなかりければ、きこえさせ給ける 二条院

きみはなほちりにしはなのこのもとにたちよらむとはおもはざりけり (二八三二)

御かへし 上東門院

はなちりしみちにこころはまどはれてこのもとまでもゆ

かれやはせし (二八三三)

## 『玉葉集』には、

一品宮と申しける時、後冷泉院春宮におはしましけるに、まゐらせ給て、藤壺にすませ給うける比、上東門院内にまゐらせ給へりけるに、ひんあしくて御たいめんなかりければきこえさせ給うける 二条院

(二二八六)七番の歌形は万代集に同じなので省略する)

とあり、両書の傍線部は『栄花』にはない表現。『玉葉集』の「藤壺」に住んでいたというのは『栄花』を読めば知られる内容である。

## 12

「越後の弁」には待遇関係で敬語がつかない場合もあるが、巻三四、一品宮が東宮妃となりかつての藤壺住まいになり、「古女房」たちが亡き中宮威子を思い出しているところに、「心のほど推しはかりたまひて、弁の乳母、女房のもとに」(二九七頁)と歌を送る場面に、尊敬語が見える。

## 13

出羽弁については、宮内庁書陵部蔵六女歌集(二五二・二三八)所収の「経信卿母集」から、「女院」彰子女房と見る向きもある。だが、冷泉家本「帥大納言母集」にない部分であり、私家集大成解説に、「二四首の本文のあとに、経信母頌ともいうべき長文の後記を付している」と説明がある。家集にしては説話的な散文部分が大きくて、またいつの段階で成されたものかも不明。また、出羽弁は「大宮」(威子)女房と読める文脈でもある。

## 14

和田律子氏『藤原頼通の文化世界と更級日記』(新典社、二〇〇八年)第一部第九章「藤原頼通の最晩年」。

## 15

末松剛氏『平安宮廷の儀礼文化』(吉川弘文館、二〇一〇年)第二部第六章「儀式・先例からみた藤原頼通」。

## 16

頼通は、宇治への行幸があった一月後の、十一月五日関白を辞す表を奉る。十二月五日には、「政巨細悉可諮詢」という勅答があつた(『公卿補任』)。ところが、十二月十二日、後冷泉天皇は「不豫」、翌年治暦四年二月には天皇は「弥以不豫」と病が重くなり、三月二十三日に頼通は、久しく「重痾」であつた理由で上表、四月十六日に関白を辞した。四月十七日(一説に十六日)に教通が関白となり、十九日に後冷泉天皇は高陽院で崩御した。

## 17

『国文学研究』百五十集、二〇〇六年十月。

## 18

元木泰雄氏『人物叢書 藤原忠実』(吉川弘文館、二〇〇〇年)、玉井力氏『平安時代の貴族と天皇』第一部第二章「院政」支配と官人貴族層」(岩波書店、二〇〇〇年)、美川圭氏「後三条天皇―中世最初の帝王」(『王朝の変容と武者』古代の人物6、

- 清文堂、二〇〇五年）、同『院政』（岩波新書、二〇〇六年）、他。  
 中丸貴史氏『江談抄』壺切剣に関する一考察―書かれた口伝をめぐって―（学習院大学大学院『日本語日本文学』創刊号二〇〇五年三月）。
- 21 20 『後拾遺集』『御堂関白集』にも見える。  
 拙著『王朝歴史物語の享受と方法』（竹林舎、二〇一一年）第Ⅱ編第一章『栄花物語』続編考―敬避表現と人物呼称から―。  
 『類題抄（明題抄）影印と翻刻』（笠間書院、一九九四年）の  
 312 十五首（天喜三十七題者実綱朝臣大殿）が、師実家の早い歌会例であろう。なお、「大殿」呼称は頼通にはなく師実のこと。また、『範永集』には、「左大臣殿の中將におはせし時に、東三条院にて、花未だあまねからず、といふ心を」という詞書の歌（一六番）があり、師実の「中將」時代の歌会が見える。師実の任中將は、天喜三（一〇五五）年二月十四歳のときで、翌年に中納言となる。『類題抄』312は十四歳のときの歌会である。  
 注21に同じ。
- 24 23 本文は、『神道大系 朝儀祭祀編四 江家次第』**八** 大將儀（神道大系編纂会、一九九一年）による。  
 ウに「みあれの日」とある。新編全集頭注に、『百鍊抄』承保三年四月二十六日条「今年ヨリ御阿礼ノ日ヲ以テ式日ト為ベキ由、宣命ニ載セラル」を引用する。
- 27 26 末松剛氏。注15著書第一部第三章「撰関賀茂詣の成立と展開」。梅沢本には、「中納言」の傍に「上東門院御方に故院の御子といはれける中納言といふ人」とあり、「いかにして」に「或者
- 28 此哥出羽弁」と傍記がある。  
 『源氏物語の巻名と和歌』（和泉書院、二〇一四年）。
- 29 後藤祥子氏「今鏡の和歌」（歴史物語講座第四卷『今鏡』風間書房、一九九七年）。
- 30 注8に同じ。
- 受領日…二〇一四年十二月三日  
 受理日…二〇一四年十二月五日